

## 「ノン・サンスの世界」(二)

——アントン・チエーホフをめぐつて——

中村 雄二郎

### IV

チエーホフが文筆活動をすすめていった八〇年代は幻滅の時代であつた。七〇年代の前半「ヴ・ナロード（人民の中へ）」を合言葉に、若きロシア・インテリゲンツィアが、民衆とくに農民の教化と解放をめざして展開した「ナロードニチェストヴォ（人民主義）」運動の夢は、ものの十年もたたぬうちに無残にうち砕かれた。理想をかかえて農民のなかへ入つて行けば行くほど、かれらとの間によこたわる断層を痛烈に思い知らされた。「ナロード（人民）」に対する物質的・精神的負い目返債の抱負と、都会生活の腐敗に毒されないロシア農民の健全なエネルギーと叡知への期待に出發した「ナロードニキ（人民派）」は、弾圧のもとに挫折をくりかえし、その一部はテロリズムへと赴く。アレクサンドル二世の暗殺（一八八一年）は、このテロリスト運動の頂点を示すもので

あつた。宰相ポベドノースツェフは皇帝の暗殺を利用して国内に恐喝政治体制を確立し、ここにロシアは重苦しくもやりきれない時代を迎える。八〇年代の暗澹たる時代気分を象徴するように、ガルシンは、悪とのたたかいに空しく破れ癡狂院に身を滅ぼす一青年を描いた『紅い花』（一八八三年）を書き、自らもその主人公と同じく、悩ましい発作にかられて、高い階段の上から身を投げ、自殺した（一八八八年）。

念のためにいえば、ガルシンは一八五五年の生まれであるから、まさしく初期ナロードニキの同世代人である。そして、一八六〇年生まれの前チエーホフはそれにやや遅れる。むしろ、ナロードニキやガルシンとチエーホフとの違いは単なる世代の相違につくまるものではない。が、それにしても、この世代の相違は、作家チエーホフの出立点を考える上で、一つの手掛りにはなりそうだ。

『イワーノフ』（一八八七年）は『退屈な話』（一八八九

年」と並んで、多くの人々によつて、チェーホフの作品中「とくに自伝的性質の顯著な作品」として挙げられている。シェストフなどは、これらの作品の一行一行が歎歌にみちているが、人が他人の不幸をみてそんなに涙を流すとは、一寸想像できない。まさしくそれは作者の身につまされた悲哀である、とまで言っている。とくに『イワーノフ』については、『イワーノフ』の主人公は自分を働かすぎて疲れはてた労働者にたとえているが、この比較をそのままこの劇の作者にも適用して誤るおそれがないものと信ずる、と自信をもつて断定する。非人称で書かれた伝記的事実よりも自分自身の「眼識」に頼る、と大見得をきるだけあつて、シェストフの「眼識」は凡庸でない。が、ときに平凡きわまる「事実」が非凡な「眼識」以上にものを言うことがある。

不思議なことに誰も言及していないのだが、『イワーノフ』でチェーホフがとりあげたロシア・インテリゲンツィアの良心的分子とは、直接的には初期ナロードニキの世代人ではなかつたか。イワーノフの台詞をきこう。第四幕の幕切れ近く、もはや覚悟をきめたイワーノフが自嘲的におのれの生涯を語るくだりである。

ぼくも以前は若くて、熱烈で、真剣で、相当に分別もある男でした。愛も、憎しみも、信仰も、世間なみとは違つていました。働くのにも希望をもつにも、他の十人なみのことはやりましたし、風車とたたかつたり、壁へ壁をぶつつけるようなこともしました。自分の力を計らないで、前

後の分別もなく、世間みずに大きな重荷を背中にひつかつぎました。そのため背骨がめきめきと折れて、筋が弛んでしまつたのです。ぼくはやたらに急いで、若氣にまかせて自己を浪費しました。……ぼくは力つきて挫折したのであります！……今あなたの前には三十五で疲れきつて幻滅に悩む男が立っています。かれは羞恥の念にもえながら、自分の弱さを嘲笑しているのです。……ああ、ぼくの内部のプライドが今どんなに狂奔していることでしょう。

『イワーノフ』を觀て、觀客は喧囂怒号し、拍手し、ヒッスした。バーでは殆んど格闘をひきおこし、廊下では学生が誰かを抛り出そうとして、二人が警官に拉し去られた。三十二年間劇場につとめた後見が未だかつてみたこともないような昂奮が觀客と舞台の上に漲つた。こうした受けとられ方はナロードニチェストヴォ運動の帰趨とはなれて考えられるものではない。

わたしは泣言を言う不幸な人間についてこれまで書かれたすべてを総括し、わがイワーノフをもつてその最後の言葉を発表せしめようとする大胆な夢想をいだいてきた。わたしのみるところでは、すべてのロシアの小説家、劇作家は失意の人間を描こうとしたものの、かれらはみな問題について確固とした形象および見解をもたず、本能的に書いたにすぎない。(スウォーリン宛 一八八九・一・七)

こう書いたとき、かれは誰よりも、その前年に狂死したガールシンを、そしてその作品を思い浮べていたに違いない。初

期ナロードニキとガルシンの亡霊を、次の世代の人間としてチェーホフは引受けなければならなかつた。まさしく「身につまされ」ながら。と同時に、次の世代の人間として、チェーホフは初期ナロードニキの世代の悲劇に対して、冷静、客観的な分析を加えた。『イワーノフ』は破滅の世代に代つて歌つた「白鳥の歌」といふべきだろう。

ところで、破滅の世代にはまだしも悲劇がありえた。ガルシン——という代りに『紅い花』の主人公たる患者といつてもいいのだが——の発狂と自殺は悲劇的でありえた。が、もはやチェーホフにとつては、発狂や自殺はドラマの結末たりえない。チェーホフは、『発作』（一八八九年）の主人公ワシリーエフ——かれは娼家の女たちの屈辱的な生活をまのあたりみて嫌悪に駆られ、苦悩にさいなまれて発作をおこす——を臭素加里とモルヒネで鎮静させている。事もあろうに「ガルシン追悼記念文集」のなかで、正気のみまで狂気であり、生きながらにして死んでいる時代にあつて、狂気や死はドラマの出发点でしかない。自殺や発狂によつて一つのドラマの幕がおりた後に、もう一つのドラマがはじまる。はるかによりきれないドラマが。ここでは、はじめから生埋めになつており、狂つている以上、一切の逃れ路は断たれている。生き甲斐のない無為な生活、そこにあるのは怖い倦怠、退屈。退屈——この言葉をチェーホフは、生涯を通じてその手紙のなかで、天候のことでもいふような気安さで、何十回となく使っている。

それにしても、『退屈な話』（一八八九年）とはみごたな題をつけたものだ。ここでは、誰もかれも生きながらにして死んでいる。それは主人公たる老教授ニコライ・ステパーノヴォッチ某——学者として一点非のうちどころのない輝かしい過去をもつた老教授ばかりでない。かつては「すぐれて明晰な知性と清らかな魂と美」をそなえ、学問に深い理解をもつて、幸福な生涯を礎いてきた老妻もそうであれば、老教授の同僚の忘れがたみで、かれが後見人になつてゐる若くて美しい娘のカーチャすらそうである。老妻は、「年をとつた、おそろしくふとつた、不細工な、一片のパンのためにつまらない心労や恐怖の鈍い表情を浮べ、借金と貧乏という不断の想念に曇らされた眼つきをして、ただ家計のことしか話のできない、ものの安くなつたときにしか笑顔をみせることを知らない女」と化した。カーチャは「くる日もくる日も寝椅子にねそべつて、本を、とくに長篇小説や中篇物語を読んでゐる。」「もし誰か彼女の生活ぶりを描写しようとする人があつたら、その画面における気分の主調をなすものは怠惰であらう。」「怠惰な肉体、怠惰な瞳、怠惰な魂。むろん、病状は老教授においてもつとも悪化している。いや、老教授のみが自分の病状を自覚している、病的なまでに敏感に自覚している、といった方がいかにも知れない。

王者の特権のなかでもつとも美しく、もつとも神聖なもののは寛容の権利だ。わたしはこの特権を無限に利用してゐたものだから、いつも王様のような気持でいた。……しか

し、今日ではわたしはもはや王様ではない。わたしの心には奴隷にふさわしいものばかり生ずる。邪悪な思想が日夜頭の中をさまよい、今まで知らなかったような感情が魂の中に巣喰つてゐる。……これは一体どうしたことだろう。

この新しい理想や感情が信念の変化から生じたものとすれば、この変化はどこからきたのだろう。世の中が悪くなつたのか。わたしがよくなかつたのか。それとも以前のわたしが盲目で無頓着だつたのか。

過去の名声も、大学での講義も、同僚や学生との交渉も、妻や子供の存在も、すべてがうとましく、退屈や焦燥以外の何ものもよび起さない。昔日の黄金は砂礫にかわつた。かれの唯一のなぐさみはカーチャの存在であり、かれの唯一のたのしみは、女優への夢に破れて自堕落になつた彼女に幸福な生活を与えてやることである。だが、彼女の必死の問いに答えられなかつたかれは、カーチャをも永遠に失う。

「ニコライ・ステパーヌイチ！ あたしはこれ以上、こんなふうには生きてゆけませんの！ ゆけませんの！ 後生ですから、早く、今すぐ言つてちょうだい——あたしはどうしたらいいのか。どうぞ仰しやつてちょうだい。あたしはどうしたらいいのか。」

「わたしに何がいえよう」わたしは困惑する。「わたしには何もいえやしないよ。」

「助けて下さい！」と彼女はわたしの手をつかんで、そ

れに接吻しながら泣く。「だつて、あなたはあたしのお父さまじやありませんか！ あなたは聰明な、教育のある方じやありませんか、永い人生を過してきた方じやありませんか！ あなたは先生だつたんじやありませんか！ どうぞ言つてちょうだい——あたしはどうしたらいいのか。」

「ほんとうにカーチャ、わたしには分らないんだよ……」「働け」とか、「財産を貧乏人に施せ」とか、「自分自身を知れ」とか言うのはやさしい。そして、それを言うのがやさしいが故に、かれは答えるべき言葉を知らないのだ。「わたしには分らないんだよ。」チェーホフは前年（一八八八年）に『灯火』を書いたときも、その結果を「この世のことはなんにも分らない」と結んでゐる。この頃のチェーホフの精神状況がうかがえはしまいか。それは、いうまでもないことだが、厭世主義でも虚無思想でもない。かれは、厭世主義や虚無思想のカルテをとつていたのである。病患に診断を下すために。老教授は言う。

「わたしの思想、感情そして事物の観念には、それらすべてを綜合して一つの全体とする共通の要素が全く缺けてゐる。あらゆる感情、あらゆる思想はわたしのなかで別々に生きている。いかに鋭い分析家をもつてしても、科学、演劇、文学、学生についてのわたしの批判や、わたしの想像が描き出すさまざまな画面のなかに、共通の観念とか、生ける人間の神とか名づけられるものを見出すことはできない。そして、もしそれがないとすれば、つまりなんにも

ないわけである。」

こうした診断は、この救いのない作品を読む人々に若干の安堵を与える。同時代の批評家オボレンスキーなどは、「共通の観念」の缺除というチェーホフの洞察にほぼ感激したらしく、「八〇年代末葉の厭世主義」と「自暴自棄な絶望観」は、この厭世主義を批評的に解消しようとする八〇年代末葉の才能ある文学者たちの声によつて、とつて代えられつつある。チェーホフのこの「新作」は「かく生くべし」という意識の到来を示している」とまでのべている。だが、安堵するのはまだ早い。それどころか、この診断は、絶対入手不可能な薬によつてしか治癒できないことを明らかにしたようなもので、このままではこの先一步もすすめない性質のものだ。

## V

『退屈な話』を書いてから間もない一八九〇年のはじめ、チェーホフは突如として單身サハリンへの旅へ出る決心を明らかにして、人々を驚かせた。サハリンといえば、当時のロシア人にとつては、地の果てなるシベリアのさらになたにある呪われた囚人島以外の何ものでもなかった。それに出掛けるとなれば、すでにシベリア横断は行われていたといえ、鉄道は満足に敷かれておらず、ろくろく道もない曠野を数千哩にわたつて半有蓋馬車で踏破しなければならぬ。胸を病み、健康の人並でないチェーホフが、なぜサハリンへなぞ行く気になったのであろうか。

旅行の動機——ところが、何もチェーホフのこの場合にかぎつたことではないが、この「動機」というのが曲者なのである。われわれは、どんな行動にでも、とかく「動機」というものをあてがいたがる。とくにわれわれを不安におとし入れる異常な行動に出会う場合、相手が狂人でもないかぎり、なんとかしてその「動機」をみつけたがる。相手が狂人であれば、まだしも拒否できるが、そうでない場合には、相手の行動を自分の心理と論理のなかで脈絡をつけずには安心できないからであろう。だが、どんな行動にも極め手になるような動機があるとはかぎらない。いわんや危機に直面したとき、せつばつまつた事態に立ち到つたとき、または飛躍がなされるとき、はつきりした、意識的な動機を期待する方がおかしい。そうした際に人を行動に駆り立てるのは、自分のおかれた状況、それ以上に自分自身に課した課題に対する意識下の一種の反射本能である。

したがつて、旅行の「動機」ということならば、たまたま試験準備をしていた自分の刑法、裁判法、監獄法などのノートを見て、「まるで足もとから鳥の立つように思い立つた」という弟ミハイルの言葉だけで十分である。むしろ、ここで明らかにしようと思うのは、「わたしは出掛けます——この決心は絶対的です」(プレシチエーエフ宛 一八九〇・二・一〇)と書かせ、かれを「頭の中にも紙の上にもサハリン以外何一つない」「サハリン・マニア」(同 二・一五)にした「反射本能」の発現を、かれ自身がどう受けとめ、ひそか

にこれに何を期待したか、ということである。

わたしは、わたしの旅行が文学にも科学にもならん寄与するものでないことを十分承知の上で、出掛けるのです。

……思うにこの旅行は、肉体的、精神的に半年間の不断の労苦であつて、それがまたわたしにとつて必要缺くべからざることなのです。なにしろ、わたしもロシア人で、すっかり怠け癖がついてしまいましたからね。自分で自分を仕込んでやらなければなりません。……よしんばこの旅行もわたしに何ひとつ与えないとしましょう。でも、果してこの旅行中に、二日や三日、わたしが一生涯、歓喜なり悲哀なりを以て思い出すような日に出会わないでしようか。

(スウォーリン宛 一八九〇・三・九)

また、チェーホフは、現代の批評家が作家に対して貢獻していることをみとめるべきだというシチューグロフの意見に反駁して、こう書き送っている。

あなたがその權威をみとめておられる批評が、もしあなたやわたしの知らないものを知っているとしたら……それはとうにわれわれに行くべき道を示し、われわれは何をなすべきかを知り、フォファーフは癡狂院に行かず、ガルシンは今日なお承らえ、バランツェーヴィッチは憂うつに沈まなかつたでしょう。われわれもまた今日のように無聊に悩むこともなく、あなたも劇場通いをするこゝもなければ、わたしもサハリンに惹かれるこゝもなかつたでしょう。……どうかわたしのサハリン旅行に対しては、文学的

希望など決してもたないようにして下さい。わたしの出掛けるのは、觀察のためでも印象のためでもなく、ただ単に半年ほどこれまでと違つた生活を送りたいからなのです。

(一八九〇・三・二二)

チェーホフは、他人に対しては、期待しないで呉れ、とくにかえし言いながら、自分自身に対しては、サハリン行きに予感を感じ、期待を寄せているのだ。思想の病理を追究し、精神の王国内に人間の再生をはかつたものの、底なしの泥沼の深さを思い知らされ、腐りきつた時代気分 of 病毒に次第に犯されて行くおのれを見出したとき、突如としてサハリンがかれの関心をとらえた。世人に怖れられ、嫌われ、目をそむけられた罪囚の島は、かれにとつて脱出口とも生甲斐ともなつた。ロシア本土の沈滞しきつた、愚劣な、退嬰的な空氣をぬけ出して、生々しく非情な現実を身を曝し、鮮烈な生存感をよびおこすことを期待したので。馬泥棒におのれの情熱のすべてを賭け熾烈に生きるメーリクを描いた(『泥棒』前号Ⅱ参照)のが、サハリン旅行への準備——主として関係文獻の読破——に多忙をきわめたこの時期であつたことは注目されていい。『泥棒』については、こんな手紙もある。

欲と、一部は靈感に刺戟されて、短篇を一つ書きました。……うんと縮めるか、ところどころ手を入れるかしなければなりません。手を入れることは今でもできるわけですが、わたしの頭が今はサハリン調になつているので、文芸方面では箴と呎の区別もつかないのです。しばらく時を

おいて、校正で読む必要があります。(スウォーリン宛  
一八九〇・三・一五)

チェーホフはサハリンで、全島にわたって完全詳細な住民調査を行い、「死刑以外の一切のもの」をみた。かれは数限りない経験をし、体内に「饑えたバターのような、いい知れぬ苦渋」を味つた。そして、周到、適確な観察をひかえ目な文体で綴つた優れたルポルタージュ『サハリン島』を書いた。さらに、この旅行は作家としてのチェーホフの視角をじりじりと変えていつた。

旅行前には、『クロイツェル・ソナタ』はわたしにとつて一事件だったので、今ではそれは、滑稽で無意味に思われるのです。何も旅行したので急に大人になつたわけでもなく、気が狂つたわけでもなく——どうしたのだから、自分でも分りません。(同 一二・一七)

トルストイズムからの離脱——そう言つてしまえば、それに違いないのだが、文化的教養への懷疑、簡易生活への傾倒、人生の最高意義の探究、といったトルストイズムの教説に対して批判的態度をとることよりも、作品『クロイツェル・ソナタ』の呪縛からのがれることの方が、はるかに困難なことを知らねばならない。いいかえれば、作品をこえることなしにして、その作者の思想をこえることはできないのだ。『クロイツェル・ソナタ』に飽き足りなさを感じたとき、チェーホフの内的世界の一角に、トルストイの美学と思想を色褪せさせるものかが、存在を主張していた。観念や思想に還元

することのできぬ、ずつしりと重量感をたたえた現実、といったらいいだろうか。現実でまぎらわしければ、事物、いやいつそのこと物質といつてしまおう。

元來が医学の勉強をしたチェーホフだから、何事にもまして科学への信頼は厚かつた。かれは『退屈な話』の老教授に言わせている。「最後の息をつなぎながらも、わたしはやはり、科学こそはもつとも重要な、もつとも美しい、人生にとつてももつとも必要なものであること、それは常に愛の最高表現であつたし、将来もそうだろうということを、そして、ただこの科学のみによつて人間は自然と自分にうちかつたのだということを信じ続けるだろう。」「百年後にこの世に生きかえつて、ひと眼でいいから、科学のその後の成行をみたい。」また、当時ロシアで評判になつたブルジェの『弟子』をめぐつて、かれとしては珍しく興奮した句調で、その露骨な反科学、反唯物論的態度を難詰したこともある。「唯物的傾向は、狭いジャーナリスティックな意味の一派でも、一傾向でもありません。それは偶発的な、思いつきなものではありません。必要にして避くべからざる、そして人間の権限外のものです。地上に生きる万物は、必然的に唯物的ならざるをえません。……最高位の生物、思惟する人間もまた、必然的に物質主義者です。かれらは物質のうちに真理をもとめます。なぜなら、ほかのどこにもそれをもとめるところがないからです。……人間に物質的傾向を禁ずることは、真理の探究を禁ずるのも同然です。」(スウォーリン宛 一八九・五七)

ところが、その反面、『退屈な話』では科学の上に「共通の観念」がおかれたし、ブルジュエについても、もしかが唯物論攻撃にあたつて、同時に唯物論者たちに「天にある無形の神」を示し、かれらがそれを見うるだけの労をとつてくれたら、「話は別」なのだ、という。つまり、科学を信頼し、物質を尊重しはするものの、人間にとつてもつと缺くべからざるものがある、というのだ。

観念や思想にとらわれた、さらに甚だしい場合には、毒された人間は、物質をみくびり、蔑視しながら、現実を観念や思想のもとに従属させようとする。復讐される日がかかることも知らないで、『グーセフ』（一八九〇年）のパーヴェル・イワヌイチは、グーセフに言う。

おれは誰も、なんにもこわいたあ思わない。ここがおまえとおれの違う点だ。おまえらは無学で、文盲で、叩きのめされた人間だ。おまえらにはなんにも見えやしないし、見えても分りやしないんだ……。……おまえらは賤民だ、憐れむべき人間だ……。ところが、おれは違う。おれは何もかも心得ている。……。……おれは抗議の権化だ。横暴な振舞に抗議する。偽善やお為ごかしを黙つて見ちやいない。……。……おれの舌を抜いてみる。手真似で抗議してやる。穴蔵に叩きこむがいい。一里先で聞えるようにわめいてやる。でなければ、絶食して、死んで、奴等の後暗い良心を悩ましてやる。殺すなら殺せ。幽霊になつて出てやる。……。……極東には三年つとめただけだが、おれのことは百年たつたつて忘れ

まい。なにしろ、誰とでも喧嘩をしたからな。ロシアからは「帰つてくるな」と友達が言つてくる。だが、おれはこれとおりの、ちゃんと、つらあてに帰つてやるんだ……。……そうとも……。……これが生活というものだ。これでこそ生活といえるのだ。

だが、二日後には、パーヴェル・イワヌイチも多くの死体と同じように、「規則どおりに」袋の中へ入れられ、「聖者も罪人も」容赦しない海へ投げこまれてしまふ。誰が「良心」を悩まれたらうか。誰がかれを「百年たつても」想い出すであらうか。かれに無学、文盲とののしられ、賤民とさげすまれたグーセフの死が、その屍をねらい、弄ぶパイロット・フィッシュや鱈の水中での鮮かな活動、そして、緑色、紫色、金色、そしてバラ色の光が雲間から流れ出、やがて柔かなライラック色に染まる大空、この壮麗な魅惑的な空を映して自らも優しい、喜ばしげな、情熱的な、人間の言葉では名づけようもない微妙な色になる大洋を背景に、描かれるとき、パーヴェル・イワヌイチのさわがしい饒舌は一段と虚しさを増す。『グーセフ』がサハリン旅行後の最初の作品であるといつたら、あまりに辻褄が合いすぎているであらうか。

## VI

『決闘』（一八九一年）の主人公、大蔵省の青年官吏イワン・アンドレイイチ・ラーエフスキーは、自分を「不幸な余計者」と感じ、自分を「自分には理想がない、生活に指導精



神がない」という点を責めていた。かれは二年前、人妻であるインテリ女のナデージタ・フョードロヴナとかけおちし、なにがしかの土地を手に入れて額に汗して働き、葡萄をうえぬをつくる……といった未来の夢を描いてコーカサスへやってきたのだが、やつて来た最初の日から、自分を、そんなこととは到底できない「破産者」と感じてしまった。それからというものは、カルタと酒と愚痴話でその日その日を送っているという態たらく。借金はある……その上ナデージタ・フョードロヴナが鼻について、嫌で嫌でたまらなくなつたのである。なんとかして、この女を棄ててペテルブルグへ逃げ出そう、そうすれば、自分に必要なものはすべてえられる……

チェーホフは、この男——ラーエフスキーに、水母の胎生学研究のためにこの地へやつてきた青年動物学者フォン・コーレンを対峙させる。フォン・コーレンは明快冷徹な実証主義的唯物論の権化ともいふべき男で、こんなことを傲然といはなつ男である。「愛というものは、なにかの点でわれわれ人類のためにならないようなもの、現在未来を問わず人類に害を与えそうなものをとりのぞくことにあるのです。わたしたちは経験によつて、また事実によつて、肉体的精神的にアブノーマルな人間たちこそ人類をおびやかすものであることを教えられています。果してそうだとすれば、そういうアブノーマルな人間たちは撲滅しなければなりませんまい。もしもわれわれにこういう連中を導いて尋常な人間に仕立ててやるだけの力がないとしたら、そのときわれわれは、こういう

連中が手も足も出せないようにしてしまふだけの、つまりこういう連中を絶滅してしまうだけの力と見識とをもつべきです。」かれはラーエフスキーが溺れかかつていたら、ステッキでもつともつと突込んで溺れさすことを「社会奉仕」と考へている。

二人はことごとくに反目し合い、憎悪はもえ上り、互に相手の存在が我慢ならなくなる。そして、決闘……。あまりにも明瞭な道具立てだ。チェーホフは、フォン・コーレンの手を借りてラーエフスキーを、つまり、実証主義的唯物論によつて「農奴制の残滓」たる破産者を、裁こうとしたのである。か。おそらくそうではあるまい。あるいは、当初はそれを期待しなかつたとは言えないかも知れぬ。なるほど、フォン・コーレンの一種の使命感に貫かれた冷徹、「科学的」な論理と、何事にもたじろぐことを知らない実行力は、ラーエフスキーのごとき「孱弱者」「不適者」を裁き、断罪を下すにふさわしくもみえよう。フォン・コーレン自身も、ラーエフスキーを苛酷に罰したがっている。が、フォン・コーレンはラーエフスキーを裁くことはできないのだ。たとえ、撲滅することはできても。そして、ラーエフスキー一人は撲滅されても、ラーエフスキーの従輩はあとからあと出てくるであらう。フォン・コーレンの力はそこまでは及ばない。チェーホフには、そのことが次第にはつきりしてきたに相違ない。

あした決闘というその前夜、ラーエフスキーは、警察署長

キリーリンに抱かれているナデージタ・フョードロヴナを、その現場をみてしまう。かれは屈辱と嫌悪に押しつぶされ、おのれの罪深さを思い知らされる。彼女を怠惰と虚偽の泥沼の生活へひきずりこんだのは、おのれ自身ではなかつたか。

キリーリンは、かれのはじめたことを受けついで、かれの「弟子」ではないか。かれは、おのれの投げた礫にうたれたのだ。おのれ自身によつて裁かれ、罰せられたのだ。かれの心のうちには、生まれ変わったような変化がおこつた。かれは不幸な、墮落したナデージタ・フョードロヴナこそ、かれにとつて唯一人の、近しい、親身な、かけがえのない人間であることを理解した。かれは、決闘の場所へ行く車のなかで、「生きて帰りたい」としみじみ思つた。」

「自分の一挙一動を一般化せずにはいられず、自分の愚劣な生活に対する説明や弁解を、誰かの学説なり、文学上のタ イプなりのうちに見出さずにはいられなかつた」男が、たとえばトルストイの「われわれ貴族は退化しつつあり、云々」といつた言葉で、自ら慰めていた男が、その愚劣な生活から脱け出す糸口をつかんだのだ。これは、今までのチェーホフの作品にはなかつたことである。それも、確固とした「指導精神」や「共通の観念」の発見によつてなされたわけではない。

「共通の観念」や「指導精神」だが、それらは抽象概念の上に礎かれるならば、いかに理想を説き、人類愛を標榜しようとも、専制的ならざるをえない。ラーエフスキーは、フォン

・コーレンの「指導精神」について、こう言っている。

あの男は、理想もまた専制的だ。普通の人間だつたら、公益のために働く場合には、まず自分に近いものの……一口にいえば、個々人に目安をおくものだ。ところが、フォン・コーレンにとつては、個々人なんか犬ころか虫けらも同様で、かれの生活の目的とするにはあまりに小さすぎる存在だ。かれが働いたり、探検に出かけたり、そこで顎の骨を折つたりするのも、身近かな者に対する愛のためでなく人類とか、つぎの時代とが、人間の理想的種類といつた抽象概念のためなんだ。かれは人類の種族改良のために奔走しているが、その見地からすれば、われわれは単なる奴隸、大砲の餌食、犬畜生にすぎないのだ。……だが、この人類の種族とは一体なんだ。

裁くものは裁かれる。ラーエフスキーとフォン・コーレンの二人についていえば、裁かれたのはラーエフスキーではなくて、むしろフォン・コーレンではなかつたか。それはともかく、フォン・コーレンの専制主義はまだしもおそろるに足りない。それは一つの論理であり、論理に対しては別の論理をたてることも可能だからである。事実としての、動かすべからざる現実となつた、空気のように充満した専制主義は、そうは行かない。そこで何よりも秩序が大切だ。秩序の枠内にいるかぎり、大概のことは大目にみられる。が、秩序の敵に通謀しようものなら、秩序は、この世の一切を語らつて反逆者に当つてくる。政治的秩序の反逆者には監獄がある。そ

して、精神的秩序の反逆者には癲狂院がある。

ガルシンの『紅い花』の主人公たる狂人は、たまたま癲狂院の花壇にみつけた紅い罌粟の花のうちに、世界の一切の悪の権化をみた。人類のあらゆる涙、あらゆる胆汁、罪なくして流された血を一滴もあまさず吸いとつて、罌粟の花は、傲然と紅く咲いている。かれはこの専制主義の集中悪にたたかいていどみ、刺しちがえて死んだ。

チェーホフが『六号室』（一八九二年）を書いたとき、ナロードニキ系の批評家ミハイロフスキーはいちはやくこれをとりあげ、『紅い花』との比較論をやつてゐるが、もとよりチェーホフ自身、『紅い花』を念頭におかなかつたはずはないし、それだけに、自ら期するところもあつたに違いない。

ミハイロフスキーは、チェーホフのこの「新作」は「独特の名作で、深い感銘を与える作品である」といいながらも見逃しがたい缺點として、「全登場人物の来歴が詳細にのべられてゐるのに、そのなかで誰が狂人で誰が正気なのか、はつきり区別できない」ことを挙げてゐる。ミハイロフスキーはとも『紅い花』にとらわれてゐるようだ。『紅い花』の主人公は、狂気のうちに専制主義の集中悪に復讐をとげた。かれは満ち足りて死んでいった。ここでは、少くとも作品の構成上正気と狂気は截然と分かれ、主人公は自分の病気をみとめてゐる。それでこそ、あの鮮烈な「紅い花」のイメージが成り立つのだ。

「誰が狂人で誰が正気なのか、はつきり区別できない」——果してこれは『六号室』の缺點だらうか。詳しいことは次号に譲るとして、むしろ、狂気と正気を区別する基準そのものが狂つてしまい、理不尽な暴力がこれにとつて代つたおそろしい世界を描き出したことこそ、この作品の真骨頂ではなかつたか。

（未完）